

日本語受動文における A' 移動

藤 本 滋 之

1. 序：UTAH と英語受動文の smuggling 分析¹

本稿では、日本語受動文の派生に A' 移動が関与していることを議論する。² どのような構文であれ、その基底構造を決めるとき、UTAH (uniformity of theta assignment hypothesis: Baker 1988) を仮定すると、構文の基底構造は主題役によって決まることになる。UTAH を前提とし、主題役を〈動作主〉(Agent)、〈場所〉(Location)、〈存在物〉(Theme)の三つのマクロな主題役に限定し(macro-roles: Foley and van Valin 1984、加賀 2001、Kaga 2007)、Jackendoff (1972)、Grimshaw (1990)における主題階層を前提とすると、すべての構文の基底構造において argument が生起する順序は(1)ようになる。

(1) Thematic hierarchy: 動作主 Agent > 場所 Location > 存在物 Theme³

英語の受動文(2a)の基底構造として、GB 理論は(2b)を仮定したが、これは(1)の主題階層に反するので退けられる。標準理論は(2c)を基底構造として仮定したが、〈場所〉役を担う目的語 DP (the wagon)が TP 指定部に内的併合(つまり移動)する過程で、(3)の最小性原理を破ることになる。

¹ 本稿は、日本英文学会九州支部第 75 回大会 (2022 年 10 月 23 日、西南学院大学)において口頭発表 (招待発表) した論文に加筆したものである。貴重な御質問・御意見を賜った方々に心から御礼申し上げます。

² Chomsky (2004) に従うと「A' 移動」は「A' (内的) 併合」とすべきであるが、本稿では両者の区別は問題にならないので前者を用いることにする。

³ 存在する物、移動する物、出現する物が担うマクロな意味役割を、加賀 (2001) は〈存在者〉、Kaga (2007) は〈Locatum〉と呼んでいるが、本稿では〈存在物〉(Theme)と呼称することにする。

- (2) a. The wagon was loaded with hay by John.
 <Location> <Theme><Agent>
- b. _____ was loaded the wagon with hay by John.
 ↑ <Location><Theme> <Agent> …… 主題階層(1)に違反
- c. _____ John loaded the wagon with hay.
 ↑ <Agent> <Location> <Theme> …… 最小性原理(3)に違反

- (3) 最小性原理⁴: 次の形状において、 X^1 は、 X^3 と同じ性質である X^2 を差し置いて X^3 と関係することはできない。

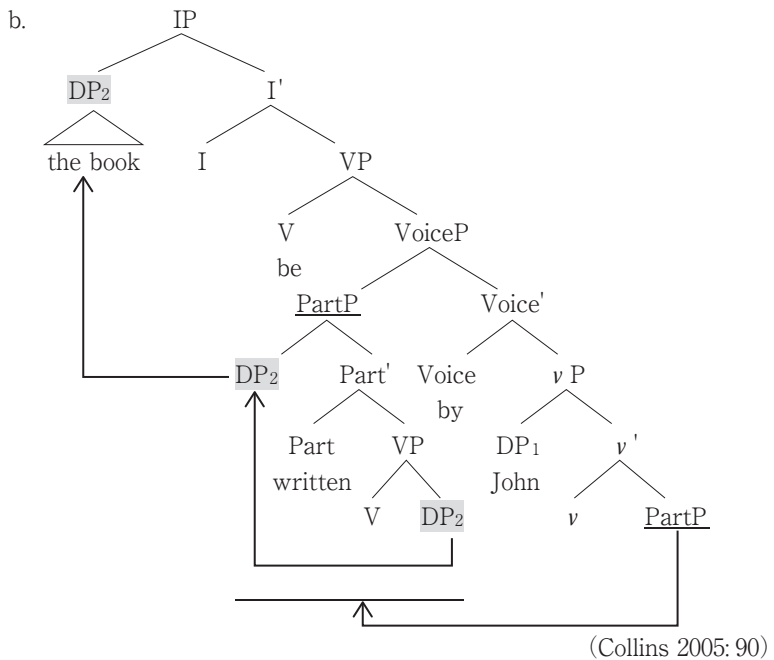
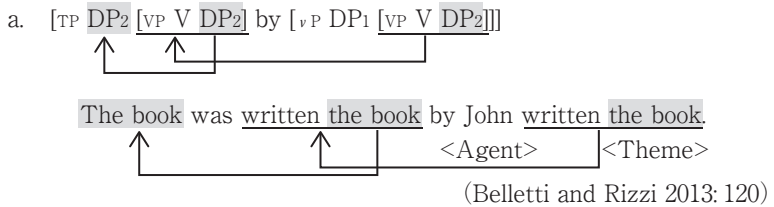
... X^1 ... X^2 ... X^3 ...

(中島 2016: 142; cf. Hornstein 2001, 2009, Rizzi 1990)

受動文派生における最小性原理違反、つまり目的語名詞句が文の主語位置に移動する際、目的語名詞句よりも主語位置に近い νP 指定部にある<動作主>を越えてしまう違反を回避するため、Collins (2005) が提唱し Belletti and Rizzi (2013) が支持したのが、(4)のような smuggling (密輸出) という移動操作である。

⁴ 受動文の基底構造も主題階層に従うと仮定し、VP 内主語仮説を仮定すると、マクロな主語役としての<動作主>は νP 指定部に併合される。受動文では、<動作主>よりも階層が低い<場所>や<存在物>が<動作主>を越えて TP 指定部に移動することになるので、最小性原理(3)に違反することになる。この原理は、移動先の選択の曖昧さを規制する Rizzi (1990) の Relativized Minimality を起源とし、Hornstein (2001, 2009) が移動元選択を決定する原理へと転換した原理であるが、ここでは移動という文法操作にも言語にも限定されない普遍性の高い原理として捉えている中島 (2016: 142) の定義を挙げておく。受動文の派生構造においては、 X^1 は TP 指定部つまり受動文の主語位置、 X^2 は νP 指定部にある<動作主>、 X^3 は VP 内にある<場所>あるいは<存在物>を指すことになる。

(4) Smuggling (密輸出)



(4a)の派生において、下位の動詞句 VP は、上位の動詞句 v P へ付加される。 v P 内の VP を v P 外に持ち出すこの操作が smuggling (密輸出)の要点である。 v P 外に持ち出された VP は、 v P 指定部にある DP₁ よりも高い位置にあるので、その補部にある DP₂ が TP 指定部へ移動する際、DP₁ を飛び越す、すなわち(3)の最小性原理(minimality principle)に違反することはない。

これに対し、SOV 語順の日本語においては、受動文を派生する際に(4)のよ

うな smuggling を用いて最小性原理を回避するという手段は採れない。可能な分析として Collins (2005) は(5)の三つを示唆している。

- (5) a. 移動がない。
 b. A 移動ではなく A' 移動である。
 c. <動作主> Agent は ν P 指定部ではなく付加部(adjunct)の位置にある。

本稿では、日本語受動文の構造と派生について、これら三つの可能性を考察する。2節では、日本語の受動文の派生には(5b)の A' 移動がかかわっていることを議論する。3節では、(5a)と(5c)の場合を加えて考察する。具体的には、Hoshi (1994) のニ受身・ニヨッテ受身のパラダイムを再考することになる。

2. 日本語受動文の統語構造

本節では、日本語の受動文は A' 移動を伴うことを考察する。次の受動文(6)は、三つの項(下線部)と各項が担う三つの主題役すべてが揃っている例である。(6)の一番上にある <A> は <動作主 Agent>、<L> は <場所 Location>、<T> は <存在物 Theme> を表す。各例とも、最初の名詞句が<場所>、次の名詞句が<動作主>、最後の名詞句が<存在物> (ここでは移動する物) を担う。各例の最後に「事実」とカッコ書きしているのは、ガ格主語の自然さを出すためである。

- (6) <L> <A> <T>
- a. 光秀が信長に丹波を与えられた(事実)。
 b. 光秀が信長に丹波攻めを命じられた(事実)。
 c. ヨーコがジョンに自作の曲を贈られた(事実)。
 d. ウクライナがアメリカに軍事情報を提供されていた(事実)。

(6)の例はいずれも、二格名詞句が表す<動作主>によって、ヲ格目的語名詞

句が表す<存在物>が、主語名詞句が表す<場所>まで移動させられたことを表す移動使役の受動文である。<場所>役を担う主語名詞句が、<動作主>役を担う名詞句の上位に位置するので、基底語順の主題階層(1)から何らかの変化が加えられたと考えられる。⁵

日本語は SOV 語順のため、英語におけるような smuggling は使えない。そこで、(7)のような A' 移動を仮定する。移動(内的併合)の元位置のコピーを () で示すことにする。

- (7) <L> <A> <L> <T>
 [DP 光秀が] [CP Op 信長に (Op) 丹波を与えられた]。 (= (6a))

(7) の構造は、文頭の DP を主語、後続する CP を述語とする叙述関係 (predication) の構造である (cf. Williams 1980, Rothstein 1983, Browning 1987)。CP 内から主語位置へ名詞句が移動するのではなく、CP 内における空演算子 (null operator) Op の移動であるから A' 移動であり、他の argument を越えても最小性原理(3)に違反することはない。

ここでさらに、(7) のより精密な構造について Hicks (2009) に従うことにする。Hicks によると、tough 構文の不定詞節内における空演算子は、(8) のように、目的語名詞句を補部とする名詞句複合体である。(7) の場合と同様、内的併合つまり移動の元位置のコピーを () で示してある (以下同じ)。この分析は、代

⁵ <存在物>の役を担うヲ格名詞句 (直接目的語) を主語とする受動文も可能であるが、次の例のように、はじめの二格名詞句が生物、あとの二格名詞句が無生物でなければならないという制約がある (Hoshi 2018)。

- i. 私は親に城に連れまわされるうちに、城に興味を持つようになった。
 (ニッポン城めぐり <http://cmeg.jp/pc/yoron/61?page=2>)
 b. 小太郎と盛信が氏康に城に呼ばれた。
 (中央公論新社 <https://www.chuko.co.jp/chuko/>)
 c. 私は友人に結婚式に招かれた。
 d. この前の休日、私は妻に買い物に連れまわされた。
 e. その会社の COO が CEO に関連会社に左遷された。
 f. モハメド・アリが猪木にリング外に投げ飛ばされた。

名詞あるいは照応形が、その先行詞名詞句を指定部にもつ名詞句複合体から派生するという Kayne (2002) の束縛理論に動機づけられたものである (Hornstein 1999, 2001 も参照)。

- (8) Everyone is tough [_{CP} [_{Op} (everyone)] [_{vP} (Op everyone) [_{vP} PRO to please (Op everyone)]]].

(8)において空演算子 Op は、階層が下位の項が最小性原理(3)に違反して移動するのを回避する smuggler の役割を果たしている (Hicks 2009: 546-552)。この分析を日本語の受動文(7)に適用すると、(9)のようになる。

- (9) [_{DP} 光秀が] [_{CP} Op (光秀) [_{vP} (Op 光秀) [_{vP} 信長に (Op 光秀) 丹波を与え]られ]た]。

受動文の主語名詞句(光秀)は、はじめに空演算子と複合名詞句を成した状態で動詞の間接目的語位置に外的併合される。動詞が受動化されると複合名詞句が vP 指定部の外側(内側には「信長」が基底生成つまり外的併合)に移動し、さらに CP 指定部に移動する。最後に、複合名詞句(Op + 光秀)の中から「光秀」が移動して派生が収束する。以上、(9)がここで仮定する日本語受動文の構造になる。

以下では、受動文の構造に(9)のような A' 移動を仮定する経験的証拠を示す。一つ目の根拠は、(10)のような長距離移動が容認されることである。

- (10) a. この種の本が、店長_iに [PRO_i 店頭のいちばん目立つ所に(この種の本)並べるよう] 指示される(傾向)。(埋込節の補部位置から移動)
 b. ケンが教授に [[ケン] 一番苦労して書いた] レポート] を失くされた。(関係節(複合名詞句)内の指定部(主語)位置から移動)
 c. アヤが先生に [[アヤ] 一番かわいがっていた] 子ども] を褒められた。(同上)

目的語コントロールの構文と考えられる(10a)では、埋め込まれた補文の補部位置に主節主語(この種の本)と同一指示的な空所を想定できる。(10b, c)では、関係節(複合名詞句)内の指定部(主語)位置に主節主語(それぞれケンとアヤ)と同一指示的な空所を想定できる。複合名詞句を越える A' 移動を想定することになるが、日本語の複合名詞句では島の効果が現れない。このような長距離移動は A' 移動の特徴であり、A 移動では容認されないものである。

長距離移動は、下記(11)が示すように、空演算子の移動が想定される tough 構文においても可能である(中川 1997)。

- (11) a. この種の本_iが教師にとって学生に_{t_i}買うように命じにくい。
 (Kaneko 1994: 38、中川 1997: 74)
- b. この種の本が教師にとって学生_iに [Op (この種の本) PRO_i (Op この種の本) 買うように] 命じにくい。

(10a)の受動文における、補文内の目的語名詞句と主節主語名詞句の関係と同様の関係が、(11a)のような tough 構文においても成り立つ。日本語の tough 構文の構造が英語の tough 構文(8)と同じ構造であると仮定すると、(11a)の構造は(11b)のようになる。同じように長距離移動を許す日本語の受動文が tough 構文(11b)と同様の構造であるとするならば、(10a)の構造は(10')のようになり、空演算子の移動を想定するのは自然な推論と言える。

- (10') この種の本が、店長_iに [Op (この種の本) PRO_i 店頭のいちばん目立つ所に(Op この種の本)並べるよう] 指示される(傾向)。

(10')の主語は<存在物>であるから、主題階層が上位の<動作主>(PROつまり店長)と<場所>(店頭のいちばん目立つ所)を越えて移動しており、A 移動なら最小性原理(3)に違反することになる。しかしながら、A' 移動であれば最小性原理に違反せず問題ない。

受動文に A' 移動を仮定する二つ目の根拠は、(12)の例におけるように寄生

空所(parasitic gap)が容認されることである。

- (12) この種のメールの多くが[*e* 開かずに] (この種のメールの多く)削除される。

寄生空所は wh- のコピー(A' 束縛を受ける空範疇)が存在するときのみ生起可能であるから、(12)の受動文にも(12')のような A' 移動を仮定することで、うまく説明される。

- (12') この種のメールの多くが[Op (この種のメールの多く) PRO [*e* 開かずに] (Op この種のメールの多く)削除される]。

寄生空所は(13)のように tough 構文でも生起可能であるが、これも受動文(12')と同様に空演算子の A' 移動を仮定することで、うまく説明される。

- (13) a. このような手紙_iが[*e*_i開けないで] *t*_i捨てにくい。(中川 1997: 75)
 b. このような手紙が[Op (このような手紙)_i[*e*開けないで] (Op このような手紙)捨てにくい]。

日本語の受動文に A' 移動を想定する三つ目の根拠は、(14c)の例が示すように、島の効果が観察されることである。

- (14) 受動文に見られる島の効果
- ジョンは[なぜ大学を中退するつもりだと]考えられているのですか。(補部)
 - *ジョンは[なぜ大学に行くために]勉強しているのですか。(付加部)
 - *ジョンは[(ジョン)逮捕するために]警官を派遣された。(付加部内からの移動)
 - ジョンは[彼を逮捕するために]警官を派遣された。(再述代名詞で容認度増)

- e. ?? ジョンは [自分自身を逮捕するために] 警官を派遣された。(代名詞より容認度減)

(14a)と(14b)の容認度の対立で確認されるとおり、日本語の付加部は島を構成する。これを踏まえ、(14c)を見ると、付加部内からの目的語 DP の移動は容認されない。他方、(14d)のように再述代名詞(resumptive pronoun)を加えると容認されるようになる。(14c, d)の容認度の対立は A' 移動に見られる特性である。さらに、(14e)のように照応形を加えると容認度が落ちる。「自分自身」は日本語における照応形とされており(中村 1996)、束縛領域内で A 束縛される必要がある。(14e)の容認度が低いのは「自分自身」の適切な先行詞がないためであり、「ジョン」が「自分自身」の先行詞になれないのは A' 位置にあるためと推論できる。以上のような島の効果をめぐる観察によっても、日本語の受動文において A' 移動が存在するという議論が支持される。

A' 移動を仮定する四つ目の根拠は、日本語二受動文主語の元位置が目的語位置とは限らないことである。(15)の例に見るとおり、日本語の受動文では、対応する能動文において目的語以外の位置に存在した要素が主語になることができる。

- (15) a. ①多くの人が、バンジージャンプで有名なその橋から飛び降りてきた。
 ②バンジージャンプで有名なその橋は、多くの人に飛び降りられてきた。
- b. ①市は除雪車で瞬く間に道路から雪を取り除いた。
 ②道路は除雪車で瞬く間に雪を取り除かれた。
- c. ①ジョンはメアリーと一緒にステージに上がった。
 ②メアリーはジョンと一緒にステージに上がられた。
- d. ①誰もこのプールで泳いでいない。
 ②このプールはまだ誰にも泳がれていない。
- e. ①外国資本が東京でますます多くの不動産を買収している。
 ②東京が外国資本にますます多くの不動産を買収されている。

(15a)と(15b)は起点を表す場所句、(15c)は一種の様態を表す副詞句、(15d)と(15e)は場所句の中から名詞句が移動していると見ることができる。動詞の目的語以外を元位置とする移動は A' 移動の特徴である。⁶

日本語の受動文に空演算子の移動を伴う predication の構造を想定する五つ目の根拠は、日本語の二受動文が叙述関係の適切性条件に従うことである。(16)～(18)を見よう。

- (16) a. *この歌は、よく花子に歌われた。
 b. この歌は最初、石原裕次郎に歌われたもので、団塊の世代の人たちを魅了した。
- (17) a. *この山は昨日、太郎に登られた。
 b. この山は、もう数百年も前に山頭火に登られている。
 c. アイガー北壁はまだ誰にも登られていない。
- (18) a. *このプールは昨日、小学生に泳がれた。
 b. このプールはまだ誰にも泳がれていない、完成したばかりのプールです。

(高見 2011: 31-32)

(16)～(18)それぞれ a の例は、特定の先行談話無しでは容認されない。少なくとも対応する能動文が先行談話の有無と無関係に容認されるのと対照的である。これは、日本語の二受動文を predication の構造として捉えれば自然に導かれる帰結であると思われる。すなわち、主語について意味機能の観点から叙述する

⁶ 空演算子の移動が想定される英語の tough 構文でも、次の例に見るように付加部前置詞句の補部名詞句の移動が可能であるが、さらに、残置された前置詞がなくてもよい。これは A 移動にはない特性である。

i) The room is comfortable to stay (in).

ii) The bed is good to sleep (in/on).

同様に動詞目的語以外を元位置とする移動に pseudo-passive があり、その構造も叙述関係の構造になっている可能性を Takami (1992) の機能的分析が示唆しているが、統語的な議論は今後の課題としたい。

意義がある文のみが容認される (cf. 高見 2011)。

Predication の構造を仮定する六つ目の根拠は、predication の構造であることを明示するコピュラが現れると容認度が上がることである。(19)～(22)を見よう。

- (19) a. * フェルマーの定理はアンドルーに証明された。
 b. ? フェルマーの定理はアンドルーに証明されたのだった。
 c. ? フェルマーの定理はアンドルーに証明されたんだっけ？
- (20) a. * その歌は、よく花子に歌われた。
 b. ? その歌は、よく花子に歌われたのだった。
 c. ? その歌は、よく花子に歌われたんだっけ？
- (21) a. * この山は昨日、多くの登山者に登られた。
 b. ? この山は昨日、多くの登山者に登られたのだった。
 c. ? この山は昨日、どのくらいの登山者に登られたんだっけ？
- (22) a. * このプールは昨日、小学生に泳がれた。
 b. ? このプールは昨日、小学生に泳がれたのだった。
 c. ? このプールは昨日、小学生に泳がれたんだっけ？

上記の例が示すように、容認されない受動文でも、ノダというコピュラの機能を表すと考えられる要素 (cf. 大竹 2009) を伴うと容認度が上がる。これも、日本語の受動文が predication の構造になっていることを示唆する証拠と考えてよいであろう。

七つ目の根拠として、格付与の問題がある。加賀 (2017: 148) は、Baker (2014) が提唱する「依存格」(dependent case) の考え方にに基づき、(23) のような日本語の格決定手順を提案している。

(23) 動詞句の領域において、

- ① 動詞の語彙特性に基づき、当該名詞句に語彙格・内在格を与えよ。⁷
- ② 指示性をもつ最上位の名詞句にガ格を与えよ。
- ③ 指示性をもつ最下位の名詞句にヲ格を与えよ。
- ④ 残りの名詞句にニ格を与えよ。ただし、すでに同一領域内で「ニ」が付与された場合を除く。

(23)のような手順で格付与が行われるとすると、(24b)のような受動文におけるヲ格の付与が問題になる。(24b)において、「太郎」が移動元でヲ格を付与されることがなければ、(23)の③に従い、(24b)の「花子」がヲ格を付与されることになるからである。

- (24) a. 花子ガ 太郎ヲ なぐった。
 b. 太郎ガ 花子ニ (太郎ヲ) なぐ・られた。

この問題を解決するため、加賀(2017)は、移動する名詞句は移動元と移動先の両方で格が付与され、音形を持たない移動元のコピーは格も表示されないと考えている。(24b)で「太郎」の元位置は最下位に位置するので、(23)の③に従いヲ格を与えられ、他方、「花子」は(23)の④に従いニ格を与えられる。⁸移動の元位置でも格を与えられると想定するのであれば、その移動はAではなくA'と考えるのが自然である。⁹

⁷ 加賀(2017:脚注7)は、Woolford(2006)における語彙格と内在格の区別をここでは考慮しないと断っている。

⁸ 移動元でも格付与が行われると仮定すると、次のような二格名詞句が移動した受動文で問題が生じる。

i) ウクライナ軍が NATO 軍に (ウクライナ軍ニ) 最新兵器を提供されていた (事実)。

格付与の手順(23)①と④に従うとニ格は一度だけ付与されることになる。しかしながら、上記の文ではニ格が二度付与される必要がある。(23)④の但し書きを削除すればこの問題は解決すると思われるが、詳細は稿を改めて論じたい。

⁹ 加賀(2017)で提案されている格決定手順(23)は、脚注5で挙げたような二つの二格を伴う文の派生を予測しない点でも問題かと思われる。

最後に、(25)のような所有受身を巡る議論がある。

- (25) a. 連合艦隊が敵の戦闘機に [(連合艦隊の)旗艦] を沈められた。
 b. 大坂城は徳川の兵に [(大坂城の)すべての堀] を埋められた。



(藤本 1996)

Kubo (1990)、Terada (1990)は、名詞句内からの所有名詞句の A 移動を主張したのに対し、Homma (1995)は、A 移動分析の問題を四つ挙げて反論している。(1)明示的な再帰形が所有名詞句の位置に生起可能なこと、(2) topicalize された位置でも所有名詞句の痕跡を束縛できること、(3) bijection が可能なこと、(4) locality がかからないことの四つである。しかしながら、これらの問題はすべて A 移動ではなく A' 移動を前提とすれば解消する。

以上、2節では、日本語二受身文の構造として A' 移動を仮定する(9)を提案し、A' 移動を支持する証拠を八つ示して議論した。

3. Hoshi(1994)の受動文パラダイムと A' 移動分析

本節では、直接受身と間接受身について、久野と Kuroda の相反する伝統的な構造分析を統合したと言える Hoshi (1994) の分析を再考する。Hoshi (1994)によると、日本語受動文は(26)のように分類される。(26a)の二直接受身では PRO の移動が仮定されていて、日本語の直接受身に移動を認める久野(1973, 1978)と、移動を認めない Kuroda (1965, 1979)の分析を統合したと言える。(26b)の間接受身には移動がない。(26c)のニヨッテ受身では、英語の *be*-passive と同様に目的語名詞句が主語位置に移動する。

- (26) a. ニ直接受身：ジョンが [PRO メアリーに (PRO)殴ら] れた。

 b. ニ間接受身：i) ジョンが [雨に降ら] れた。
 ii) ジョンが [メアリーに自分のことを自慢さ] れた。
 c. ニヨッテ受身：ジョンがメアリーによって (ジョン) 殺された。


まず、(26a)の二直接受身においても空演算子の A' 移動があることを見る。2節で考察した受動文の構造と派生(9)を適用すると、(26a)は(27)のようになる。

(27) ジョンが [Op (ジョン) メアリーに (Op ジョン) 殴] られた。

主語

他方、Hoshi (1994)によると、(26a)では目的語名詞句の位置に基底生成される PRO が埋込節内で A 移動する。この移動に Hornstein (1999)のコントロール分析を適用すると、(28)のようになるであろう。

(28) ジョンが [(ジョン)PRO メアリーに (ジョン PRO) 殴] られた。

主語 付加部

(28)を提案する証拠として、Hoshi (1994)は(29)の対立を挙げている。

(29) a. ジョン_iが [PRO_i メアリー_jに自分_{i_j}の家で (PRO)殺さ] れた。

主語 付加部

b. ジョン_iが [メアリー_jに自分_{i_j}のことを自慢さ] れた。

主語

(29a)において「自分」の先行詞は文の主語名詞句「ジョン」であるが、(29b)における「自分」は「ジョン」とともに二格名詞句「メアリー」もあり得る。この対立は、(29a)の二格名詞句(メアリー)が主語位置にないのに対し、(29b)のそれは主語位置にあるため、と説明される(Hoshi 1994)。しかしながら、次の例(30)においては二格名詞句(メアリー)が「自分」の先行詞になり得る。

(30) a. ジョンの手紙がメアリーに自分(自身)の部屋で急いで読まれた。

b. ジョンがメアリーに自分(自身)の部屋に呼ばれた。

ヲ格目的語のない(30)は(29a)と同じタイプの受動文である。どちらの文においても二格名詞句が「自分(自身)」の先行詞になり得るので、これを主語位置にあるものと考えて問題ないであろう。¹⁰したがって、二直接受身(26a)の派生においては、(28)のような A 移動ではなく(27)のような A' 移動を仮定するのが合理的な分析と言えよう。

次に、二間接受身(26b)においては、i)、ii) ともに移動がないので最小性原理違反の問題も生じない。

最後に、ニヨッテ受身(26c)では、ニヨッテ句が付加部であり、これを越えて移動しても最小性原理の対象にはならない。ニヨッテ受身の主語名詞句は目的語位置から A 移動したものであり、ニヨッテ名詞句が項の位置にあれば最小性原理に抵触することになるが、付加部にあるため問題なく容認される。ニヨッテ句が付加部である経験的証拠として、二格名詞句とは異なり「自分(自身)」の先行詞になれないという事実がある。また、主語名詞句の A 移動の証拠として、イディオムの一部を主語とする受動文がニヨッテ受身においてのみ可能という事実もある (cf. Hoshi 1991, 1994, 藤本 1996)。

ここではさらに、長距離移動に関するデータ(31)を加えておこう。

- (31) a. *エミがケンによって [アヤが (エミ) 尊敬していると] 言われた。
 b. エミがケンに [アヤが (エミ) 尊敬していると] 言われた。

(31b)の例におけるように、二受身では補部 CP 内からの目的語名詞句(エミ)の抜き出しが許されるが、(31a)のニヨッテ受身では許されない。二受身の主語は A' 移動によって派生したものであるから、島ではない補部 CP 内からの抜き出しは許される。しかしながら、(31a)のニヨッテ受身の主語名詞句(エミ)は A 移動によって派生するため、補部であっても CP 内からの移動が許されない。2 節(10)で見た長距離移動が、二受身では可能であるがニヨッテ受身では容認さ

¹⁰ 受動文の主語名詞句と二格名詞句のどちらも構造的には「自分」の先行詞になり得るものの、述語動詞の意味によってどちらかが優先される傾向にあると考えるのが、この現象の妥当な分析ではないと思われる。

れないということである。

ニヨッテ受身は、直接受身(26c)と下記の例のような所有受身の両方で可能である。(32)は先に見たニ所有受身(25)をニヨッテ受身にしたものである。

- (32) a. 連合艦隊が敵の戦闘機によって旗艦を沈められた。
 b. 大坂城は徳川の兵によってすべての堀を埋められた。

ニ所有受身は、(25)について見たとおり、名詞句内からの所有名詞句(aでは「連合艦隊」、bでは「大坂城」)のA'移動を仮定することで、Homma (1995)が指摘した問題は回避される。他方、ニヨッテ所有受身の構造は、Homma (1995)に従うと、二重対格構文において上位の対格名詞句がA'移動して派生する。対応する能動文が存在しないのは二重対格制約(Harada 1971)によると分析される。したがって、所有受身についてもニ受身はA'移動、ニヨッテ受身はA'移動として区別されることになる。¹¹

以上、本節では、Hoshi (1994)の受動文パラダイムについて、それぞれの構造と派生を再考した。各タイプを確認すると次のようになる。それぞれ最後に各タイプの代表例の番号を付している。

- (33) a. ニ直接受身：OpのA'移動、叙述(predication)構文(6)/(12)
 b. ニ所有受身(主語名詞句とヲ格名詞句との間に所有関係等有り)：OpのA'移動、叙述(predication)構文(25)
 c. ニ間接受身(主語名詞句とヲ格名詞句との間に所有関係等無し)：移動なし(26b)
 d. ニヨッテ直接受身：内項のA'移動(26c)
 e. ニヨッテ所有受身(主語名詞句とヲ格名詞句との間に所有関係等有り)：二重対格構文の上位の内項のA'移動(32)

¹¹ Homma (1995) はニ受身とニヨッテ受身を区別せずに議論を進めている。

Hoshi (1994)との違いは、(1)所有受身(33b)と(33e)をそれぞれ二間接受身、ニヨッテ直接受身と区別したこと、(2)二直接受身(33a)とニ所有受身(33b)を空演算子 Op の A' 移動による派生として統一したこと、の二つである。

4. 結 び

本稿では、主語名詞句と同一指示的な空所を想定できる二受動文は、(9)のような A' 移動を伴って派生することを主張し、日本語受動文のパラダイムとして(33)を提案した。帰結として、Collins (2005)が指摘した日本語受動文における最小性原理回避の三つの手段(5)のうち、(33a, b)が(5b)すなわち「A 移動ではなく A' 移動」の場合に該当し、(33c)が(5a)すなわち「移動がない」場合に該当する。最後に、(33d, e)が(5c)すなわち「<動作主>が付加部位置にある」場合に該当することが明らかになった。

参考文献

- Baker, Mark (1988) *Incorporation: A Theory of Grammatical Function Changing*, University of Chicago Press, Chicago.
- Baker, Mark (2014) *Case: Its Principles and Its Parameters*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Belletti, Adriana and Luigi Rizzi (2013) "Ways of Avoiding Intervention: Some Thoughts on the Development of Object Relatives, Passive, and Control," *Rich Languages from Poor Inputs*, ed. by Massimo Piattelli-Palmarini and Robert C. Berwick, 115-126, Oxford University Press, Oxford.
- Browning, Marguerite A. (1987) *Null Operator Constructions*, Doctoral dissertation, MIT.
- Chomsky, Noam (2004) "Beyond Explanatory Adequacy," *Structures and Beyond*, ed. by Adriana Belletti, 104-134, Oxford University Press, Oxford.
- Collins, Chris (2005) "A Smuggling Approach to Passive in English," *Syntax* 8, 81-120.
- Foley, William A. and Robert D. Van Valin, Jr. (1984) *Functional Syntax and Universal Grammar*, Cambridge University Press, Cambridge.
- 藤本滋之 (1996)「直接受身・間接受身再考」『西南学院大学英語英文学論集』37, 37-65.
- Grimshaw, Jane (1990) *Argument Structure*, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Harada, Shin-ichi (1971) "Ga-No Conversion in Japanese and Idiolectal Variation in

- Japanese.” *Gengo Kenkyu* 60, 25-38.
- Hicks, Glyn (2009) “Tough-constructions and Their Derivation,” *Linguistic Inquiry* 40, 535-566.
- Homma, Shinsuke (1995) “Syntax of Possessor Passive in Japanese,” *Tsukuba English Studies* 14, 1-40.
- Hornstein, Norbert (1999) “Movement and Control,” *Linguistic Inquiry* 30, 69-96.
- Hornstein, Norbert (2001) *Move! A Minimalist Theory of Construal*, Blackwell, Oxford.
- Hornstein, Norbert (2009) *A Theory of Syntax: Minimal Operation and Universal Grammar*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Hoshi, Hiroto (1991) “The Generalized Projection Principle and Its Implications for Passive Constructions,” *Journal of Japanese Linguistics* 13, 53-89.
- Hoshi, Hiroto (1994) “Theta-role Assignment, Passivization, and Excorporation,” *Journal of East Asian Linguistics* 3, 147-178.
- Hoshi, Hiroto (2018) “The Nature of the Animacy Hierarchy: A Perspective from a Study of Japanese Passives,” 『秋田大学教養基礎教育研究年報』 20, 45-54.
- Jackendoff, Ray (1972) *Semantic Interpretation in Generative Grammar*, MIT Press, Cambridge, Mass.
- 加賀信広 (2001) 「意味役割と英語の構文」 米山三明・加賀信広 『語の意味と意味役割』 研究社、東京
- Kaga, Nobuhiro (2007) *Thematic Structure: A Theory of Argument Linking and Comparative Syntax*, Kaitakusha, Tokyo.
- 加賀信広 (2017) 「日本語受動文の統語構造再考(2)」 『文藝言語研究』 71, 133-162.
- Kaneko, Yoshiaki (1994) “Some Topics in Tough Constructions,” *Current Topics in English and Japanese*, ed. by John Hinds and Irwin Howard, 122-154, Kaitakusha, Tokyo.
- Kayne, Richard S. (2002) “Pronouns and Their Antecedents,” *Derivation and Explanation in the Minimalist Program*, ed. by Samuel D. Epstein and T. Daniel Seely, 133-166, Blackwell, Malden, Mass.
- Kubo, Miori (1990) “Japanese Passives,” ms. MIT.
- 久野 暉 (1973) 『日本文法研究』 大修館、東京
- 久野 暉 (1978) 『談話の文法』 大修館、東京
- Kuroda, Shige-Yuki (1965) *Generative Grammatical Studies in the Japanese Language*, Doctoral dissertation, MIT.
- Kuroda, Shige-Yuki (1979) “On Japanese Passives,” *Explorations in Linguistics: Papers in Honor of Kazuko Inoue*, ed. by George Bedell, Eiichi Kobayashi, and Masatake Muraki, 305-347, Kenkyusha, Tokyo.
- 中川直志 (1997) 「日本語の Tough 構文について」 *IVY* (名古屋大学英文学会) 30, 73-88.
- 中島平三 (2016) 『島の眺望 補文標識選択と島の制約と受動化』 研究社、東京
- 中村捷 (1996) 『束縛関係—代用表現と移動—』 ひつじ、東京
- 大竹芳夫 (2009) 『の(だ)に対応する英語の構文』 くろしお、東京

- Rizzi, Luigi (1990) *Relativized Minimality*, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Rothstein, Susan (1983) *Syntactic Forms of Predication*, Doctoral dissertation, MIT.
- Takami, Ken-ichi (1992) *Preposition Stranding: From Syntactic to Functional Analyses*, Mouton de Gruyter, Berlin/New York.
- 高見健一 (2011)『受身と使役 その意味規則を探る』開拓社、東京
- Terada, Michiko (1990) *Incorporation and Argument Structure in Japanese*, Doctoral dissertation, University of Massachusetts, Amherst.
- Williams, Edwin (1980) "Predication," *Linguistic Inquiry* 11, 203-238.
- Woolford, Ellen (2006) "Lexical Case, Inherent Case, and Argument Structure," *Linguistic Inquiry* 37, 111-130.

